

# イライジャ - ナンバー・シックス

## 十のテスト

Jeff Pippenger

2023-10-05

私たちはこれまでエリヤの象徴性について論じてきており、現在、カルメル山とシナイ山の歴史を用いて、プロテスタント主義の角に対する段階的な検証の過程と、プロテスタント主義の角と並行する共和主義の角の段階的な政治的發展を示しています。

前回の記事では、紅海を渡った後の古代イスラエルにとって第十にして最後の試練を示す、民数記第13章と第14章の反逆を扱っていた。その歴史はミラー運動の歴史の初期の運動と一致するとともに、神の終わりの運動の歴史とも一致している。黙示録14章の三天使のすべての働きは、初めの運動と終わりの運動によって成し遂げられる。

「第三の天使のメッセージの宣言に加わる天使は、その栄光によって全地を明るく照らすであろう。ここには、世界的規模で、しかもかつてない力をもつ働きが予告されている。1840年から1844年にかけての再臨運動は、神の力の栄光ある顕現であった。第一の天使のメッセージは世界中のあらゆる宣教地に運ばれ、いくつかの国々では、16世紀の宗教改革以来どの地でも見られなかったほどの強い宗教的関心が呼び起こされた。しかし、第三の天使の最後の警告のもとでの力強い運動は、これらを上回るものとなる。」『大争闘』611頁。

始まりの運動の歴史と終わりの運動の歴史のあいだに、ラオディキアの教会の歴史がある。地上をその栄光で照らす天使は、教会ではなく運動であることが明確に示されている。

この預言に示されているその時のバビロンについては、次のように宣言されている。「彼女の罪は天にまで達し、神はその不義を覚えておられる。」ヨハネの黙示録18章5節。彼女の咎は満ちあふれ、滅びが今にも彼女の上に降りかかろうとしている。しかし神はなおバビロンの中にご自分の民を持っておられる。そして、御裁きが臨む前に、これらの忠実な者たちは呼び出されなければならない。彼らが彼女の罪にあずからず、「その災いを受けない」ためである。ゆえに、天から下って来てその栄光によって地を照らし、力強い大声で叫んでバビロンの罪を告げ知らせる天使によって象徴される運動が起こる。そのメッセージに伴って、「わたしの民よ、彼女から出て来なさい」という呼びかけが聞こえる。これらの宣言は、第三の天使のメッセージと結び合わさって、地の住民に与えられる最後の警告となる。『大いなる論争』604頁。

すべての預言者は互いに一致しており、彼らは、預言が告げられた当時の時代を特定するよりも、「終わりの日々」をより具体的に特定している。この現象の一例として、黙示録18章の天使は、黙示録10章の天使によって、かつて今も型で表されている。いずれも降りて来るとき、その栄光によって地を照らす。シスター・ホワイトは、書物『Early Writings』の中で第一の天使を特定している。

イエスは力ある御使いに、地上に降りて地に住む人々にご自身の再臨に備えるよう警告することをお命じになった。御使いが天でイエスの御前を去るとき、きわめて明るく栄光に満ちた光が彼に先立って進んだ。私は、彼の使命はその栄光によって全地を照らし、来たるべき神の御怒りを人々に警告することであると告げられた。『初期の著作』245ページ。

黙示録18章のあの天使は2001年9月11日に下ってきた。それは1840年8月11日に下ってきた天使によって予表されていた。イザヤ書6章では、イザヤは天にある神殿と神の栄光を見せられる。6章3節では、全地が神の栄光で満ちていることが示されている。それは、黙示録18章の天使が下ってくるときに起こる。

この後、私は大いなる力を持つ別の天使が天から下ってくるのを見た。地はその栄光によって照らされた。黙示録 18:1.

イザヤ書6章3節は同じ歴史を指し示している。

互いに呼び交わして言った。「聖なる、聖なる、聖なるかな、万軍の主。全地はその栄光に満ちている。」イザヤ書 6:3.

ホワイト夫人は、イザヤが見た聖所の幻を、黙示録18章の運動と結びつけている。

玉座の前にいるセラフィムは、神の栄光を仰ぎ見て畏敬の念に満たされ、ひとときたりとも自己満足に浸って自分自身を見つめたり、自分や互いを賞賛して見惚れることはない。彼らの賛美と栄光は、高くあげられ、その衣の裾の栄光が神殿に満ちる万軍の主にささげられている。やがて全地がその栄光で満たされる未来を見つめながら、彼らの勝利の賛歌は美しい詠唱のうちに互いに唱和してこだまし、「聖なる、聖なる、聖なるかな、万軍の主」と響き渡る。彼らは神を崇めることで全く満ち足りており、その御前で、御喜びの微笑みのもとにあって、もはや何ものも望まない。御かたちを帯び、その御用に仕え、主を礼拝することにおいて、彼らの最高の志は完全に達せられている。

「イザヤに与えられた幻は、終わりの日における神の民の状態を表している。」  
レビュー・アンド・ヘラルド、1896年12月22日。

ヨハネは黙示録10章および18章で、イザヤは6章で、さらにホワイト姉妹の注解も、地が神の栄光で照らされるというこれらすべての描写を同一の歴史的時点に位置づけている。全世界は2001年9月11日に起こった出来事を目撃した。1863年に終結したミラー派運動の段階的に進んだ歴史は、黙示録18章の力ある御使いが降りてくるときの歴史を、黙示録10章で降りてきた御使いに関連する歴史とともに型として示している。これらの前提を踏まえ、民数記14章に描かれている試練の過程に戻る。エジプトへ戻ろうとし、ヨシヤとカレブを石打ちにしようとした反逆者たちのためにモーセが執り成した後、神はその執り成しを受け入れられた。

主は言われた、「わたしはあなたの言葉どおりに赦した。しかし、わたしが生きることにかけて、全地は主の栄光で満たされる。エジプトと荒野でわたしが現した栄光と行った奇跡を見ながら、この十度もわたしを試み、わたしの声に聞き従わなかったあの者たちはみな、わたしが彼らの先祖に誓ったその地を見ることは決してない。

わたしを怒らせた者のうち、だれ一人としてそれを見ることはない。ただ、わたしのしもべカレブは、彼のうちに別の霊があり、全くわたしに従ったので、彼を彼が行ったその地に導き入れ、その子孫にそれを所有させる。」民数記 14:20-24.

民数記14章に記されたこの歴史は、古代イスラエルにとって最後の試練であり、彼らの失敗は、その後の四十年間にわたり荒野で死ぬという結末を彼らに確定させました。この歴史は黙示録18章と直接結びついています。というのも、そこで神は「神が生きておられるのと同じくらい確かなこととして、『全地は主の栄光で満たされる』」と宣言しておられるからです。これは神がこの歴史的記録の中に置かれた非常に強い宣言であり、それによって民数記13章と14章に表された歴史が、黙示録18章の御使いの力強い働きを指し示していたことが強調されています。黙示録18章が神の残りの民の終局を扱っている以上、神の残りの民の始まりもまた、私たちが民数記で取り上げているこの箇所描かれているのです。

1840年8月11日、イスラムに関する第二の災いの預言が成就したとき、かつて選ばれた契約の民は、正しいことがまさに証明されたばかりのエリヤのメッセージによって試された。

2001年9月11日、イスラム教の第三の災いに関する預言が成就したとき、かつて選ばれた契約の民は、正しいことが証明されたばかりのエリヤのメッセージとして、生ける者の審判の始まりを画した。

ミラー派の歴史におけるエリヤのメッセージは、預言の時という文脈の中に位置づけられていた。2001年9月11日のエリヤのメッセージは、歴史の繰り返しという文脈の中に位置づけられていた。2001年9月11日は1840年8月11日の歴史を繰り返した。というのも、どちらの日付もイスラムに関する預言の成就を表しており、またどちらも、ホワイト姉妹が「イエス・キリストに劣らぬお方」だと言った天使の降臨を示しているからである。ホワイト姉妹は、黙示録10章の天使については「イエス・キリストに劣らぬお方」だと述べているが、黙示録18章の天使についてはそのようには言っていないものの、黙示録18章の天使は「彼の」栄光によって地を照らし、地を照らすのはイエス・キリストの栄光であることを聖書は明確にしている。

初めにプロテスタントに対する試練をもたらした審判の手段は、エリヤに象徴されるミラー派運動であった。終わりにおいてセブンスデー・アドベンチストに対する試練をもたらす審判の手段は、十四万四千人に象徴されるエリヤ運動である。エリヤという象徴には複数の意味があり、彼はミラーおよびミラー派運動を表すと同時に、十四万四千人も表している。

変貌の山でのモーセは、罪と死に対するキリストの勝利の証人であった。彼は、義人の復活において墓から出てくる者たちを代表していた。死を見ることなく天に挙げられたエリヤは、キリストの再臨の時に地上に生きていて、『最後のラッパにおいて、一瞬にして、まばたきの間に、変えられる』者たちを代表した。その時、『この死ぬべきものは不死を着』『この朽ちるべきものは不朽を着なければならない』のである。コリント第一 15:51-53. イエスは、『罪を負うことなく救いのために』二度目に来られる時の御姿のように、天の光をまとっておられた。というのも、主は『聖なる御

使いたちとともに、御父の栄光のうちに』来られるからである。ヘブル 9:28;マルコ 8:38. 救い主が弟子たちに約束されたことは、いまや成就した。山上では、やがて来る栄光の御国が縮図として示された-王であるキリスト、復活した聖徒たちの代表としてのモーセ、そして天に移される者たちの代表としてのエリヤ。『The Desire of Ages』 412頁。

契約の民のうち、退けられる者は十対二で多数派である。招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない。第十の試練の失敗は、約束の地に関する悪い報告を退けて良い報告を受け入れるのか、あるいはその逆なのかという選択に左右された。したがって、ここに示された歴史は、同じ情報を解釈する二つの方法論のどちらを選ぶかに基づいて、漸進的な試練の歴史における勝利か敗北かが決まることを示している。

十二人の斥候は皆、約束の地を目にしたが、約束の地が何を意味するのかについては、二つの異なる結論が導き出された。一方の報告は人間的な恐れに動かされ、もう一方は信仰に動かされていた。一方は、神の導きを退けてエジプトの奴隷状態へ戻ろうとする願望を表し、もう一方の報告は、神の導きを信頼して約束の地へ前進しようとする願望を表していた。

ミラー派運動においても、大多数はバビロンの奴隷状態に戻ってその娘たちとなることを選び、これは第一の天使の預言的メッセージを退けるといふ彼らの決断の現れであった。忠実なミラー派の人々は、1844年春の最初の失望における見かけの失敗の後でさえ、第一の天使の預言的メッセージに従うことを選んだ。民数記の歴史は、十二人の斥候の二つの異なる「報告」を示しており、それは同じ預言的メッセージに対する二つの異なる分析を表している。1863年に、ラオデキヤ的アドベンチズムは預言的メッセージを受け入れたのではなく、以前に確立されていた預言的メッセージを拒否した。1863年に、ラオデキヤ的アドベンチズムは、ウィリアム・ミラーの働き全体を通して彼に反対していた聖書解釈の方法論へと立ち返り、それを受け入れた。預言的メッセージを拒み、奴隷状態に戻ることを望んだ者たちは、最終的に荒野で死んだ民数記14章の反逆者たちによって象徴されている。

数の十は、象徴として考えるなら、すべての象徴と同様に複数の意味を持つ。その象徴的意味は、それが置かれている箇所文脈によって理解されなければならない。象徴としての「十」は、迫害を表すことがある。試練を表すこともある。ヨーロッパの諸王の十王連合、イスラエルの北方十部族、そして国際連合における十から成る連合を表すこともありうる。スミルナの教会では、神の民は十日のあいだ患難に遭うことになっていた。

あなたがこれから受ける苦難を、何一つ恐れてはならない。見よ、あなたがたのうちの幾人かは試されるために、悪魔によって牢に投げ込まれるであろう。あなたがたは十日の間、苦難に遭うであろう。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、いのちの冠をあなたに与えよう。ヨハネの黙示録 2:10。

歴史家たちは、スミルナの歴史において最も苛烈で十年間続いた、ディオクレティアヌスによる迫害を指摘している。別の歴史家たちは、スミルナの歴史に十の異なる迫害があったとする。いずれにせよ、それらはローマ帝国によって行われたが、ローマ帝国はダニエル書7章で十本の角として表されている。その十人の王とは、アハブに象徴される王た

ちで、ローマ教皇制と姦淫し、暗黒時代に殺戮を遂行するために教皇制が用いた迫害の道具となった。「十」は、イゼベルのために迫害を実行する国家権力を表している。ダニエル書1章では、「十」は試練の期間を象徴する。

どうか十日の間、あなたのしもべたちを試してください。私たちに食べる物として野菜を、飲む物として水を与えてください。それから、あなたの前で、王の食物の割り当てを食べている若者たちの顔色と私たちの顔色を見て、あなたの見たとおりに、このしもべたちをお取り扱いください。そこで彼はこのことに同意し、彼らを十日の間試した。十日が終わると、王の食物の割り当てを食べていたすべての若者よりも、彼らの顔色はよく、からだもよく肥えて見えた。ダニエル書 1:12-15。

民数記14章では、古代イスラエルは神を十回怒らせたとき、これはある期間にわたる十の試練を表している。

しかし、まことに、わたしは生きている。全地は主の栄光で満たされる。なぜなら、わたしの栄光と、わたしがエジプトと荒野で行った奇跡を見たあの者たちが皆、今この十度にわたってわたしを試み、なおわたしの声に聞き従わなかったからである。民数記 14:21、22。

紅海での救出から十番目の試練に至るまでにあった九つの反逆、すなわち失敗した試練が何に当たるのかを知ろうとしてインターネットを調べるなら、古代イスラエルのどの失敗をその十の試練の一つとして数えるべきかについて、いくつか異なる説が見つかるだろう。私は、1844年10月22日と符合するとして明確に特定されている紅海での救出が十の試練の始まりであり、したがって1844年から1863年に生じた試練を数え始める起点である、と主張する。1798年にダニエル書の封印が解かれたときに始まった段階的な試練の過程があり、その過程は第一と第二の天使のメッセージの歴史を包含し、1844年10月22日の第三の天使の到来によって結ばれた。

ミネアポリスで、神はご自分の民に、真理の尊い珠玉を新しい枠組みでお与えになった。この天からの光は、キリストを拒んだユダヤ人が示したのと同様の頑なさをもって一部の者によって退けられ、古い道標を堅持することについて多く語られた。しかし、彼らがその古い道標が何であるかを知らないことを示す証拠があった。証拠があり、良心に訴える御言葉に基づく論証もあったが、人々の心は固く定まり、光が入り込むのを封じていた。というのも、彼らはそれを「古い道標」を取り除く危険な誤りだと決めていたからである。実際には古い道標の杭一本たりとも動かしてはいなかったのに、何が古い道標を成しているのかについて彼らの考えはゆがめられていた。

「1844年に時が過ぎたことは、大いなる出来事の時期であり、天において進行している聖所の清めが地上の神の民にとって決定的な関係をもつものであることを、私たちの驚いた目に開示した。[また] 第一と第二の天使のメッセージ、さらに第三のメッセージが、『神の戒めとイエスの信仰』と記された旗を翻した。このメッセージのもとにある標石の一つは、天において真理を愛する神の民に示された神の宮と、神の律法を収める契約の箱であった。

第四の戒めである安息日の光は、神の律法の違反者の歩む道に強い光を投げかけた。悪人が不死でないことは、古い標石である。

古い標石に該当するものとして、これ以上思い当たるものはない。古い標石を変える

のだというこの一切の叫びは、すべて想像の産物にすぎない。」『The 1888 Materials』 518.

1844年10月22日、第三の天使が手にメッセージを携えてやって来た。

イエスの聖所における奉仕が終わり、彼が至聖所に入り、神の律法を納めた契約の箱の前に立ったとき、彼は、第三のメッセージを世界に伝えるため、別の力ある天使を遣わした。天使の手には羊皮紙が渡され、彼が力と威厳をもって地上に降りると、これまで人にもたらされた中で最も恐ろしい脅しを伴う、恐るべき警告を宣言した。Early Writings, 254.

1844年10月22日、神の民が食べるべき羊皮紙を手にした天使が降りてきた。そのとき示された「ランドマーク」と呼ばれる教理は、食べて受け入れるか、退けて食べないかのどちらかである。手に羊皮紙を携えて第三の天使が現れたとき、その羊皮紙に記されたメッセージは六つの試金石となる真理を表していた。その六つの試験は、「時の経過」（二千三百年の預言を表す）、裁き（「聖所の清め」として表される）、三天使のメッセージ、「神の律法」、「安息日」、そして死者の状態（「魂の不死ではないこと」として表される）であった。

それら六つの真理は、もちろん相互に関連しているが、それぞれが個別に道標として認められていた。これらの一覧に時の経過を含めたくないと思う人もいるかもしれないが、明らかに多くの人々は、1844年10月22日が預言の真の成就であったという真理を退けた。彼らはその試練に敗れ、当然ながら、その後続く試練に取り組むことはできなかった。神が与えられる試練の進め方は、最初に与えられた試練に勝利してはじめて次の試練に関与できるという段階的な過程であることが、繰り返し示されてきた。

私たちが安息日問題についての光を示し始めたとき、私たちは黙示録14章9～12節にある第三天使のメッセージについて、明確な理解を持ってはいなかった。人々の前に出て証ししたときの私たちの主な訴えは、偉大な再臨運動は神に由来し、第一と第二のメッセージはすでに述べ伝えられており、第三が与えられようとしているということだった。私たちは、第三のメッセージが次の言葉で結ばれていることを見た。「ここに、聖徒たちの忍耐がある。ここに、神の戒めを守り、イエスの信仰を保つ者たちがいる。」そして私たちは、今と同じように明瞭に、これらの預言的な言葉が安息日改革を示唆していることを見ていた。しかし、そのメッセージに言及されている獣の礼拝が何であるか、また獣の像と獣の刻印が何であるかについては、私たちは定まった立場を持っていなかった。

神はその聖霊によって御自分のしもべたちの上に光を輝かせ、事柄は次第に彼らの心に開かれていった。それを連環を一つひとつたどって探り出すには、多くの研究と切なる配慮を要した。細心の注意と憂慮、そして絶え間ない労苦によってこの働きは進められ、ついには私たちのメッセージの偉大な真理が、明確で首尾一貫した完全な全体として、世に与えられた。

私はすでにベイツ長老と知り合った経緯について語った。彼が礼儀正しく親切な、真のキリスト者の紳士であることを知った。彼は、まるで自分の子どものように、私をやさしくいたわってくれた。彼が初めて私の話を聞いたとき、深い関心を示した。私が

話し終わると、彼は立ち上がって言った。「私は疑い深いトマスだ。私は幻視を信じない。だが、もし今夜この姉妹が語った証しが、まさしく神が私たちに語られた御声であると信じることができればなら、私はこの世でいちばん幸せな男だろう。私の心は深く動かされている。話し手が誠実であることは信じる。しかし、彼女が私たちに語ったような驚くべき事柄を見せられたということについては、私には説明がつかない。」

結婚して数か月後、私は夫とともにメイン州トップシヤムで開かれた大会に出席した。そこにはベイツ長老も臨席していた。当時の彼は、私の幻が神からのものだと十分には信じていなかった。その会合は非常に意義深いものだった。神の御霊が私の上に臨み、私は神の栄光の幻に包まれ、初めて他の惑星を見た。幻から覚めた後、私は見たことを語った。するとB. 長老が、私が天文学を学んだことがあるのかと尋ねた。私は、天文学書を開いた覚えはまったくないと答えた。彼は言った。「これは主からのものだ。」私はそれまで、彼がこれほど自由で喜びに満ちているのを見たことがなかった。彼の顔は天の光で輝き、彼は力強く教会を励ました。『証言』第1巻、78-80。

確かに、これらすべての教理的なテストは相互に関連しているが、個別に切り離すこともでき、しかもそれらは神のしもべたちに段階的に開かれていった。第七日安息日を守る教会は多くあるが、三天使のメッセージを退けている。彼らは1844年10月22日に審判が始まったという真理を退けているが、それでも安息日は守っている。これらの教理的なテストは相互に関連しているが、六つの個別のテストを成している。

先ほどジョセフ・ベイツが示したように、天文学に精通したその船長は、以前は退けていた預言の霊を受け入れた。1844年12月、エレン・ホワイトは最初の幻を与えられ、運動に第七の試練が到来した。

「聖書をあなたの導き手としなければならない。聖書を、また神が与えられた証しを研究しなさい。というのは、それらは決して神の御言葉に矛盾しないからである。もしその証しが神の御言葉に沿って語らないなら、それらを退けなさい。キリストとペリヤルは一致することはできない。」『Selected Messages』第3巻、33。

大失望の直後、ホワイト姉妹は、1844年10月22日にキリストが聖所から至聖所へ移ったと述べる記事を支持した。彼女はその出版物を「すべての聖徒」に勧めた。

私は、二千三百日の終わりにきよめられる聖所とは、キリストがその祭司である新しいエルサレムの神殿であると信じています。主は一年以上前に幻のうちに、聖所のきよめ等についてクロージャー兄弟が真の光を持っていることを、また、C. 兄弟が Day-Star, Extra (1846年2月7日) で私たちに与えた見解を書き記すべきなのが御心であることを、私に示されました。私は主によって十分に権威づけられていると感じており、そのエクストラをすべての聖徒に推薦します。『小さき群れへの言葉』12。

彼女が支持したのは、Crosier によるキリストの至聖所への移行についての記述であったが、その論文にはいくつかの誤った教えが含まれており、その中には、背教的プロテスタント主義が、ダニエル書にある「daily」をキリストの奉仕だとする教えもあった。そこで彼女は釈明を書き記し、それは1850年に最初に発表され、のちに書籍『Early Writings』に収録された。そこで彼女は、「裁きの時の叫びを上げた人々は『daily』について正しい見解を持っていた」と明らかにした。

それから私は、「『daily』」（ダニエル8:12）に関連して、『sacrifice』という語は人間の知恵によって付け加えられたものであり、本文に属するものではないこと、そして主は審判の時の叫びを上げた者たちにその正しい見解をお与えになったことを見た。1844年以前に一致があったときには、ほとんどすべての者が『daily』についての正しい見解で一致していた。しかし1844年以降の混乱のうちに、他の見解が受け入れられ、暗闇と混乱が後に続いた。Early Writings, 74.

ダニエル書における「the daily」という主題は、20世紀初頭にアドベンティズムが背教的プロテスタンティズムの方法論へ回帰したことの象徴となり、そして今日では、「the daily」に関するミラー派の正しい理解はアドベンティズムの神学者たちによって拒絶されている。シスター・ホワイトが、ミラー派が「the daily」を異教の悪魔的権力と同定したのは正しかったと明確に示しているにもかかわらず、それは拒絶されてきた。彼らは、ミラー派の理解が正しいという彼女の靈感による支持に反して「the daily」の真理を拒んだだけでなく、「the daily」がキリストの聖所での奉仕を表すと教える偽りの教義は『天から追放された天使たち！』によってもたらされたと彼女がはっきりと指摘していることにも、真っ向から反している。

「そして、敵がその心に働きかけていたダニエルズ兄弟がいた。また、あなたの心とプレスコット長老の心には、天から追放された天使たちが働きかけていた。」Manuscript Releases、第20巻、17.

アドベンチズムがいまや「作り話のごちそう」の一つとして用いているものに対する彼女の断固たる拒絶がこれほど厳しかったのは、ダニエルズとプレスコットがサタンの勢力の象徴（異教）を取り、その象徴をキリストの（聖所における）奉仕に当てはめたからである。これで教理上のテストは八つになる。

1863年へと至る歴史における第九の試練は、1850年におけるハバククの第二の表の作成である。1843年のパイオニア図表は1842年に作成されたが、それが1843年図表と呼ばれるのは、1843年のキリストの再臨を予告していたからにすぎない。ハバククの第二の表を作るようにとの命令は、1850年にホワイト夫人に与えられた。ハバククの二つの表の作成は、第一と第二の天使の歴史を第三の天使の歴史へと結びつける。彼女の生涯と働きについて孫が著した伝記の中で、彼は1850年の図表の作成に至る出来事の概観を示している。彼はホワイト夫人の関連する言葉を選び、それに自身の解説を加えるという形でその概観を提示している。

私たちがニコルズ兄弟の家に戻ったとき、主は私に異象を与え、真理は図表に明瞭に示されなければならない、前の二つのメッセージが図表に明らかにされることによって、第三天使のメッセージによって多くの人々が真理を選ぶようになる」と示された。-1850年、書簡28

この幻の中で、彼女にはまた、James White  
に出版を続ける勇気を与えるものが示された：

私はまた、印刷物を発行することは、使者たちが出て行くことと同じくらい必要だと見た。というのも、使者たちは、聞く人々の手に渡すための、現在の真理を載せた印刷物を携える必要があり、そうすれば、その真理は心から薄れないからである。また

、その印刷物は、使者たちの行けない所にも届くだろう。-同上。

新しい図表の作成はただちに開始され、翌月にジェームズが刊行したPresent Truth誌の号で、それについて兄弟たちに知らせる機会が与えられた。

図表. ダニエルとヨハネの幻を年代順に示し、現在の真理を明確に説明することを目的として作成された図表が、いまマサチューセッツ州ドーチェスターのオーティス・ニコルズ兄弟の管理のもとで石版印刷に付されている。現在の真理を教える者にとって、これは大いに助けとなるだろう。この図表に関するさらなる告知は追って行う。-『現在の真理』1850年11月。

1851年1月下旬までに、その図表は完成し、頒価2ドルで広告された。ジェームズ・ホワイトはそれをたいへん喜び、「第三天使の使命を伝えるよう神に召された者たち」に無償で提供した (Review and Herald, 1851年1月)。いくつかの寛大な寄付が、出版費用を賄う助けとなった。アーサー・ホワイト『エレン・G・ホワイト——初期の年代』第1巻、185頁。

1843年の図表について、ホワイト姉妹は、それが神によって導かれたものであったと書き記した。

「主は私に、1843年の図表は主の御手によって導かれたものであり、そのいかなる部分も改めてはならず、数字は主が望まれたとおりでであることを示された。さらに、主の御手がある上であって、いくつかの数字にある誤りを覆い隠しておられ、その御手が取り除かれるまで、誰もそれを見抜くことができなかった。」Review and Herald, 1850年11月1日。

1850年に別の図表を作成せよとの命令に伴って与えられた光を記録する際、彼女は、1843年の図表について与えられたのと同じ神の承認が1850年の図表にも与えられていることを示す一方で、当時作成されていた他の図表は主の前に受け入れられないことも指摘した。新しい図表を作成する命令は、新しい刊行物を印刷する命令とあわせて与えられた。

私は、図表作りの仕事はまったく誤っているのを見た。それはローズ兄弟に始まり、ケース兄弟がそれを受け継いで行った。図表を作り、天使や栄光に満ちたイエスを表すために、粗野でおぞましい像を形作ることに、資金が費やされてきた。こうしたことは神を喜ばせないのを私は見た。ニコルズ兄弟によるその図表の出版には神が関わっておられるのを私は見た。私は、この図表に関する預言が聖書にあるのを見た。そして、もしこの図表が神の民のために作られているのなら、ある者に十分であるものは別の者にも十分であり、もし誰かがより大きな寸法で新しい図表を描く必要があるのなら、皆も同じだけそれを必要としている。

別の図表を求めたのは、ケース兄弟のうちにある、落ち着きのない、不安で、満たされない、感謝のない思いからだ。私は見た。私は、これらの彩色された図表が会衆に悪影響を及ぼしているのを見た。それは集會に、軽薄で薄っぺらな嘲りの空気をもたらした。

神がお命じになった図表は、説明がなくても心に好ましく響くのを私は見た。図表に描かれた天使の表現には、どこか軽やかで、愛らしく、天上的なものがある。心はほ

とんど気づかぬうちに神と天へと導かれる。だが、他の作られた図表は心をうんざりさせ、心を天よりもむしろ地上のことにとどまらせる。天使を表す像が、天の存在というよりも悪鬼のように見えるのだ。私は、神から天の知恵を求め、聖霊の恵みと真理の知識において成長すべき時に、その図表が何日も何週間もケース兄弟の心を占めていたのを見た。

私は、図表を作成することに無駄に費やされてきた資金が、パンフレットなどを出版して兄弟たちの前に真理を明確に示すことに用いられていたなら、大きな益をもたらし、魂を救っただろうと見た。私は、図表作りの商売が熱病のように広がっているのを見た。Manuscript Releases、第13号、359;1853年。

彼女は率直に、「ニコルズ兄弟による [1850年] の図表の刊行には神がおられた」こと、そして「この図表に関する予言 [ハバクク書二章] が聖書にある」ことを述べている。彼女はまた、神によって命じられた「図表」 [複数;1843年と1850年] が「説明がなくても好ましく心に響いた」ことも指摘した。ハバクク書二章は、ミラー派に対し、幻を板 (複数) の上に明確に記すよう命じ、それによって二つの図表を読む者が神の御言葉の中を行き来できるようにした。神からの図表には追加の説明は不要であり、これはユライア・スミスの1863年の偽造図表の場合と同様であった。

主は私に答え、こう言われた。「幻を書き記し、それを板にはっきりと記せ。走りながらでも読めるように。」ハバクク書 2:2

第十の試みが本稿の焦点である。民数記第十四章でモーセが言及する十の試みについて、ヘブライ学者や他の神学者たちは、紅海での救い出しから十人の斥候の反逆に至る歴史の中のどの出来事を指すのか、さまざまに推測している。その歴史における反逆にはいくつかの数え方があり、どれを採るかに幅があるが、第十の試みが、責任を負う年齢に達した反逆者が皆死に尽きるまで続く、荒野で四十年にわたり人々が次第に死に絶えていく時代の始まりを画したことは確かである。

同様に、私が選んだこれら十の教理上の検証に対しては、ここで私が提示しているものより優れているように見える別の案があるために、異議を唱える人もいるかもしれない。とはいえ、第十にして最後の検証は、十人の斥候の反逆が明白であったのと同じくらい明白である。それはレビ記26章の「七倍」を退けることであった。これがそうであることを支持する預言的な証拠がいくつもある。

次回の記事では、レビ記26章の「七つの時」がラオデキア的アドベンチズムの第十にして最後の失敗であるという見解を支持する預言的証言を特定し始めます。

神の力が何が真理であることを証しするとき、その真理は永遠に真理として立ち続けるべきである。神が与えた光に反する後付けの仮定は、受け入れてはならない。自分たちには真理と思える聖書解釈を掲げて人々が現れるが、それは真理ではない。この時のための真理を、神は私たちの信仰の土台として与えてくださった。何が真理であることを、神ご自身が私たちに教えてくださった。聖霊の証しのもとに神が与えられた光に矛盾する新しい光を掲げて、一人が起こり、さらにまた別の者が起こるだろう。

この真理が打ち立てられる際に積み重ねられた経験を実際にくぐり抜けた人々のうち、今も生きている者が幾人かいる。神は恵みにより、彼らのいのちを保ち、彼らがその生涯の終わりまで、使徒ヨハネがまさに生涯の終わりまでそうしたように、自ら通ってきたあの経験を繰り返し繰り返し語り続けることができるようにしておられる。そして、死によって倒れた旗手たちは、その著作の再版を通して語り続けることになる。私は、このようにして彼らの声が聞かれるべきであると教えられている。彼らは、この時のための真理が何であるかについて証しするのである。

私たちの信仰の特別な要点に反するメッセージを携えて来る者たちの言葉を、私たちは受け入れてはならない。彼らは多数の聖句を寄せ集め、自分たちの主張する理論の根拠としてそれを積み上げる。これは過去五十年の間、繰り返し行われてきた。そして、聖書は神の言葉であり、尊重されるべきものであるが、聖句の適用が、この五十年のあいだ神が支えてこられた土台から一本の柱でも動かすようなものであるなら、それは大きな誤りである。そのような適用をする者は、神の民にもたらされてきた過去のメッセージに力と勢いを与えた、聖霊の驚くべき顕現を知らないのである。『Selected Messages』第1巻、161頁。